

## メッセージアウトライン

### ローマ 1 : 8 ~ 15 「パウロの切なる望み」

[8] パウロの感謝の理由。ローマのクリスチャンたちの信仰が当時の全世界であるローマ帝国のすみずみにまで知れ渡っているから。彼らがいかに健全な信仰を持ち、また信仰者として良き証しをしていたかということがわかる。

[9-10] パウロは彼らのことを思わぬ時はないと言い、何とかして、道が開かれて、ローマへ行けるようになることを願っている。これは口先だけのことばではなく、神があかししてくださることだと言う。ここに彼の切なる気持ちがよく表わされている。

[11] 「私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです」

これがパウロがローマへ行くことを願っている理由である。御霊が彼に与えてくださった賜物とは、福音に対する明確で全体的な理解と知識等を教え指導する能力であろう。彼はそのような霊的賜物をもってローマのクリスチャンたちの信仰を強め、確立しようと切に願っていたのである。

[12] 「というよりも、あなたがたの間において、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです」

ここでは彼は信仰および教会観というものを別の角度から言い表そうとしていると思われる。クリスチャンの信仰は一方的に教えられることによってではなく、お互いどうしの信仰によって互いに教えられ励まされ成長していくものなのである。教会はクリスチャンたちの真実な交わりによって成長していく。

[13] 「兄弟たち。ぜひ知っておいていただきたい。私はあなたがたの中でも、ほかの国の人々の中で得たと同じように、いくらかの実を得ようと思って、何度もあなたがたのところに行こうとしたのですが、今なお妨げられているのです」

パウロはローマでも「いくらかの実」つまり何人かの回心者を得ようとしている。これが彼がローマへ行くことを願う第2の理由なのである。

「今なお妨げられている」とはエルサレムの貧しい聖徒たちのために各地の教会からの献金を届けなければならなかったからである。→ローマ15:25~27

[14-15] 「私は、ギリシヤ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも、返さなければならぬ負債を負っています。ですから、私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです」

ここで言う「ギリシヤ人」とは生まれながらのギリシヤ人というよりは、当時の世界の共通言語であるギリシヤ語を話し、ギリシヤ文化の中に生きている人という意味で使われている。その意味ではユダヤ人でもアラビヤ人でもエジプト人でもギリシヤ人と呼ばれうる。「未開人」とはギリシヤ文化の外に生きている人々のこと。

要するにパウロは民族と文化を越え、知識や教育のあるなしにかかわらず、あらゆる人々に福音を宣べ伝える責任があると言うのである。彼はその責任を「返さなければならぬ負債」と表現する。このような思いは彼があのだマスコ途上で復活のキリストに出会って以来、彼の福音伝道の原動力となっているのである。→使徒9:1~20, I コリント9:16  
迫害者から伝道者へと召された者としてその使命に徹して生きる信仰の姿勢をここで教えられる。私たちが暗やみから光へ、滅びから救いへと入れられた者として彼の姿勢にならう者となりたい。